

Case Study

支部ケース・スタディ

九州支部

“島の鼓動”を伝え40年 —地域と共に歩む宮古テレビ—

宮古テレビ(株)

放送部長
新里 光宏



来年開局40年を迎える「宮古テレビ」

宮古テレビのある宮古島は、8つの島々からなる宮古列島(または宮古諸島)の中心となる島である。東京から南西へおよそ2,000km、沖縄本島から300km離れた洋上に位置しており、島の周囲は約100km、山も川もなく、一番高いところで100mほどの平坦な島である。

島で唯一のテレビ局「宮古テレビ」の放送エリアは、宮古島と3つの橋で結ばれた島々の他に、南西へ60km離れた多良間島(宮古島と石垣島のほぼ中間に位置)の合わせて6つの島となっている。人口は宮古島市と多良間村合わせ54,000人。産業は、農業や水産業の第一次産業が主体で、サトウキビや葉たばこの生産量は沖縄県内でも上位にある。また30年ほど前からは熱帯果樹のマンゴー生産にも力を入れていて、県内では一大産地となっている。さらに観光産業も盛んで、国内航空路線では宮古島と羽田や関西、そして今年から季節運行で中部国際とを結ぶ路線が就航。さらに近年は、台湾や中国など近隣の国々からの大型クルーズ船が寄港するなど、年間の観光客数は80万人台に達する見通しとなっている。

こんな宮古島に宮古テレビが開局したのは、本土復帰から間もなく6年経とうとしていた1978年5月1日。放送と通信が融合し、このような“多種多様メディア混在事情”になるとは、開局当時は想像できなかったことであろう。



宮古テレビ局舎

島にテレビがやってきた

来年5月に開局40周年を迎える宮古テレビのある宮古諸島の“テレビ事情”に触れてみたい。

宮古島でテレビの放送が始まったのが、今から50年前の1967年(昭和42年)12月22日。本土復帰を5年後に控えていた年に“宮古島にテレビがやってきた”。現在のNHK沖縄の前身OHK(沖縄放送協会)の宮古放送局から、初めてテレビ放送の電波が発射された。翌23日は、隣の石垣島の八重山放送局、さらに1年後の1968年12月には、沖縄本島の沖縄放送局でも放送を開始した。いわば宮古島は沖縄の公共テレビ放送の発祥の地ともなっている。「何事も中央から」ということを覆す歴史の一コマでもある。本土復帰を控え、将来は公共放送のNHKが沖縄でも放送されることを想定して、紆余曲折の末にこのような放送形態が取られたようだ。



40周年を記念したキャラクターと記念のロゴを募集するポスター

当時OHK宮古放送局では、那覇にあった琉球電電公社で東京から送られてくるNHKの放送をビデオテープに録画し、これを飛行機で宮古島まで運んで再生放送する異時再送信方式。速報性を要するニュースについては、その日のうちにテープが運ばれ放送された。朝のニュース番組はお昼、お昼のニュースは夕方。このためお昼に放送されるニュースではアナウンサーが「おはようございます」、夕方は「こんにちは」という出だしで違和感があった。しかしそれでも、テレビ放送が始まったというだけで大きな喜びがあった。また独自に宮古地域のニュースも放送されていた。

テレビが始まった当時、私は幼稚園児。幼い私の目には四本足の家具調テレビから“人の顔”や行ったこともない“国内外の風景”が映し出されるだけでも不思議なものであった。当時の番組では、「ひよっこりひょうたん島」、連続テレビ小説では「旅路」、大河ドラマは「龍馬が行く」が放送されていた。

「宮古テレビ」が開局

その後、OHKの放送は本土復帰に合わせNHKが継承、放送形態も東京や沖縄並みの全国同時放送となり、いわゆる「情報格差」が次第に是正されていった。しかしNHKの放送だけでは物足りないため、住民の間では次第に民間放送の開局を望む機運が起きていた。当時人気だったアントニオ猪木やジャイアント馬場が登場するプロレスや、芸能人が出演する情報バラエティー系番組などを放送する沖縄の民間放送2社の開局が待たれていた。

しかし一向に開局の動きがない。そのような状況下、宮古島では沖縄本島の民放の番組を無許可でダビングして貸し出す違法なビデオレンタル店がオープンし、賑わうようになった。このような状況を受け、宮古島の事業者が主体となって、民間放送の番組を放送するケーブルテレビ局「宮古島有線テレビ」(宮古テレビの前身)を開局させた。放送される番組については、東京の日本テレビやテレビ朝日などと直接契約を結んで放送をスタートした。

自主番組の充実

宮古テレビでは、東京にあるキー局の番組を自主チャンネル(コミチャン)で放送、さらに同じコミチャンの中に、開局当時から自主制作番組を編成し放送している。特に地元のニュースや、小中高生向けの情報バラエティー系「週刊テレビあがんにゃ」、さら



毎週土曜日に生放送している、小中高生向けの情報バラエティー系「週刊テレビあがんにゃ」

さらに地域のスポーツ・行事を取り上げた番組などを中心に放送している。このスポーツ系の番組でも、特に宮古島の知名度を「全国区」にした全日本トライアスロン宮古島大会については、毎年競技開始から終了まで完全生中継を行っている。このトライアスロン大会については、特番も合わせて制作し、コミチャンでの放送と合わせ、県内の民放でも放送。さらに大会には国内外から1,500人を越すアスリートが参加することから、中継放送をそのままネット配信し、国内外からアスリートに対する応援メールが寄せられ好評を博している。

次に自主制作のうち報道番組についていえば、開局当時から月～金は毎日30分のニュース番組を放送、県内地上波では取り上げないような細かな地域の話題についても取材し、ケーブルテレビならではの特色を生かしている。特に子ども達の活躍については、県内はもとより、九州や全国大会において上位入賞が見込まれる場合は、同行取材してニュースでの扱だけでなく、特集を組んで放送。これによりテレビの番組が子ども達

を“応援”、地元のテレビが身近な存在となっている。

また4年に1度行われる首長選挙や県議会議員選挙については、報道部の記者解説入りで開票速報を行っていて、視聴者から大きな支持を得ている。今年も宮古島市と多良間村で首長選挙があった。独自取材や投票動向を含めた出口調査を元に「当確」を打つなど、視聴者から大きな信頼を得ている。地域の視聴者が何を望んでいるか常に的確に捉えることで地上波との違いを鮮明にし、ケーブルテレビの存在価値をアピールしていると言える。また市町村議会についても、議員による一般質問の様態を中継。視聴者は自分が選んだ議員が議会でのどのように行政当局と論戦を展開しているか、直に見ることができ、議員の皆さんは緊張感をもって臨んでいる。



副調整室



今年6月に行われた
多良間村長選の中継の様子
と速報画面

“地上波的ケーブルテレビ”「宮古テレビ」

沖縄県内には、民間放送が3社あるが、日本テレビ系とテレビ東京系の局が無い。このため宮古テレビは、開局当時からこれら日本テレビ系など在京キー局の番組を購入、自主制作の番組と合わせて番組を編成し、コミチャンで放送している。県内民放が宮古島で開局する前から放送を始めていることもあり、地上波的な役割も担っている。

さらには、県内の民放2社とキー局の日本テレビの通信部的な役割を担っている。宮古島で起きる事件や事故、自然災害や台風報道、さらに話題モノについては、県内の民放での放送の他、全国的なニュースの場合は、ANNやFNN、さらにNNN系にも配信。特に台風が宮古島最接近の場合など、県内民放局が対応できない時は、宮古テレビのアナウンサーや記者が顔出しで中継リポートを行っている。

ケーブルテレビの将来

冒頭でも触れたが、放送と通信が融合し“多種多様メディア混在事情”の今、さらに追い打ちをかけるように少子高齢化による若者世代のテレビ離れ。この厳しい状況をどのように打破していくか、ケーブルテレビは今大きな転換期に立たされている。

ケーブルを通した限られたエリアの中で、いかに地域住民に支持され生き抜くか。今後はこれまで以上に地域に出向いて視聴者目線で番組制作に臨むことはもとより、地域のきめ細かな情報を載せたデータ放送の充実、そしてスマホなど携帯電話とリンクした「見て調べ・どこでもケーブルテレビ新聞」が求められよう。しかしはっきり言えることは、「ケーブルテレビは身近な地域のテレビ」であることに間違いはない。将来を担う地域の子供達をテレビを通して応援するテレビであるとともに、地域の住民に寄り添い、常に地域にこだわることで「ケーブルテレビ」とは何かが見えてくると思う。

※参考資料：「沖縄放送協会史」「宮古テレビ30年の歩み～開局30周年記念誌～」